

〔資料〕

学士課程教育の成果と卒業者が捉えている看護実践現場の課題 ～卒業者への活動状況の質問紙調査から～

古澤 幸江¹⁾ 小澤 和弘²⁾ 宇佐美 利佳³⁾ 高橋 智子⁴⁾
大川 眞智子²⁾ 両羽 美穂子⁵⁾ 北山 三津子⁴⁾

Outcomes of Bachelor Degree Program and Issues of Nursing Practice that Graduates Perceive: From a Questionnaire Survey on the Activity Status of Graduates

Yukie Furuzawa¹⁾, Kazuhiro Ozawa²⁾, Rika Usami³⁾, Tomoko Takahashi⁴⁾,
Machiko Ohkawa²⁾, Mihoko Ryoha⁵⁾ and Mitsuko Kitayama⁴⁾

I. はじめに

平成12年4月に開学した岐阜県立看護大学看護学部看護学科（以下、本学とする）は令和元年度に創立20周年を迎え、令和2年度までに1450名の卒業者を輩出してきた。

本学では、法人第1期が終了する平成27年度より、卒業者の卒業後の活動状況や現場で捉えている課題を把握し、本学の教育を振り返り、今後の教育のあり方を考える基礎資料とするために、大学として卒業者実態調査（以下、本調査とする）を実施している。平成27年度には、1期生から3期生を対象にした質問紙調査および面接調査を実施した。平成29年度には4期生・5期生を対象にした質問紙調査を実施し、大学内で結果を共有した。令和2年度は、法人第2期の5年目となり、法人第3期への準備の一環として、本調査を計画した。また令和2年度の本調査では、平成23年度に完成した「岐阜県立看護大学学士課程卒業時の看護実践能力の到達目標」（以下、卒業時到達目標とする）、平成27年度に策定した「岐阜県立看護大学看護学科の学位授与方針」（以下、DPとする）に基づいて教育成果を評価する内容とした。なお卒業時到達目標は、平成21年度入学生から統合科目として位置づけ追加され

た看護学統合演習に活用されており、同年の4年次生であった7期生から試行的に看護学統合演習を実施してきた経緯がある。

本稿では、令和2年度に実施した本調査に基づき、卒業後10年以上を迎える本学卒業者に実施した質問紙調査の結果から、学士課程4年間の教育成果、および現在の勤務施設における看護実践現場の課題を確認し、今後の教育および卒業者支援のあり方を検討するための資料を得ることを目的とする。なお、卒業後10年以上を迎える卒業者を調査対象としたのは、実践現場の中堅看護職の立場となり、本学で受けた教育に対し実践現場の状況を踏まえた意見を述べる事が可能であると考えたからである。

II. 調査対象・方法

1. 調査対象

令和3年1月時点で、本学を卒業して10年以上を迎える平成20年度卒業者（6期生）83名、平成21年度卒業者（7期生）81名、平成22年度卒業者（8期生）77名、計241名を調査対象とした。なお調査対象には三年次編入生を含む。

1) 岐阜県立看護大学 機能看護学領域 Management in Nursing, Gifu College of Nursing

2) 岐阜県立看護大学 看護研究センター Nursing Research and Collaboration Center, Gifu College of Nursing

3) 岐阜県立看護大学 成熟期看護学領域 Nursing of Adults, Gifu College of Nursing

4) 岐阜県立看護大学 地域基礎看護学領域 Community-based Fundamental Nursing, Gifu College of Nursing

5) 上智大学 総合人間科学部 看護学科 Department of Nursing, Faculty of Human Sciences, Sophia University

2. 調査方法

調査は、対象者に無記名自記式の質問紙調査により実施した。令和3年2月に質問紙を送付し、回答期限を令和3年3月22日に設定した。配付は、岐阜県立看護大学の看護研究センターが管理する卒業生および修了者に関するデータベースを用いて行い、対象者の現住所が確認できた208名に対して「調査協力のお願い（説明文書）」および質問紙、返信用封筒を配付した。配付と回収は郵送により実施した。

3. 調査項目

調査項目は、対象者の基本属性、在職者の現在の勤務状況、看護実践として実際に行っている内容、看護実践において大事にしていること、勤務施設における看護実践の課題、大学時代に身につけた能力、本学の教育に対する意見等は、平成27・29年度調査と同様の項目とした（星野ら、2017）。なお今回の調査では、平成27・29年度調査項目をベースに、卒業時到達目標及びDPの項目を包含した調査内容とした。

4. 分析方法

選択式質問項目については単純集計を行った。なお、割合（%）は、四捨五入により整数で示した。そのため、各質問における割合の合計は必ずしも100にならない。さらに、カテゴリーを併合してから分析した場合、それらカテゴリーの度数を合計してから算出した割合と各カテゴリーに対する割合の合計は必ずしも一致しない。自由記載については、記載内容を要約し、意味内容の類似性を検討し分類した。分類した内容は、看護領域の研究者間で分類の妥当性を確認した。

5. 倫理的配慮

対象者に「調査協力のお願い（説明文書）」および質問紙、返信用封筒を郵送し、返信をもって同意されたものとみなした。無記名式であるため郵送後はデータの削除ができないこと、結果は個人が特定されないように扱うことを明示した。また、得られた内容は本調査の目的以外には使用しないことを保障し、記載内容に地名・施設名などの固有名詞が含まれる場合は、特定されないよう記号化してからデータとした。

本調査は、岐阜県立看護大学研究倫理委員会の承諾を得て実施した（令和2年11月、承認番号：0271）。

Ⅲ. 調査結果

1. 回収結果と回答者の基本属性

対象者208名のうち、返送があったのは77名で回収率は37%であり、この77名すべてを有効回答とした。

回答者の基本属性を表1に示した。卒業年度は、「平成20年度（卒後12年目・6期生）」が23名（30%）、「平成21年度（卒後11年目・7期生）」が24名（31%）、「平成22年度（卒後10年目・8期生）」が28名（36%）であった。

回答者の看護職としての平均就業年数は8.8年（最短2.5年、最長23.0年）であった。「9年以上12年未満」が37名（48%）で最も多く、次に「6年以上9年未満」が27名（35%）であった。

卒業してから看護職として勤務した施設数は、平均1.8施設（最少1施設、最多5施設）であり、「1施設」が36名（47%）で最も多く、次いで「2施設」25名（32%）、「3施設」9名（12%）、「4施設以上」5名（6%）であった。

これまで勤めた施設で受けた教育について項目別に選択肢を設けて尋ねた結果は、「多くの教育を受けた」または「まあ教育を受けた」が「看護実践能力を育成するための教育」74名（96%）、「組織的役割遂行能力を育成するための教育」64名（83%）であったが、「自己教育・研究能力を育成するための教育」53名（69%）であった。

また卒業後に受けた（受けている）大学院等での教育は、「大学院博士前期課程」は6名（8%）であり、8割程度の者が「なし」であった。

2. 現在の勤務状況

回答者の現在の勤務状況を表2に示した。雇用形態は「正規職員（フルタイム勤務）」が29名（38%）、「正規職員（短時間勤務）」が7名（9%）、「正規職員（産休・育児・介護などの休業中）」が16名（21%）、「非正規職員」が8名（10%）、「勤めていない」17名（22%）であった。現在勤務している者（以下在職者とする）は60名（78%）であった。「正規職員」は休業中の者も含めて52名（68%）であった。

在職者（職種がその他の者を除く）の主たる職種は、「看護師」が39名（65%）、「保健師」が11名（18%）、「助産師」が2名（3%）、「養護教諭」が2名（3%）であった。

在職者の主たる勤務施設は、「病院（500床以上）」が最も多く16名（27%）、次いで「病院（100-499床）」14名（24%）、「市町村保健・福祉部門」が10名（17%）

表1 基本属性

項目	人数	(%)
卒業年度		
平成20年度(6期生)	23	(30)
平成21年度(7期生)	24	(31)
平成22年度(8期生)	28	(36)
無回答	2	(3)
看護職としての就業年数(年)		
平均±標準偏差(最小-最大) ^a	8.8±2.9	(2.5-23.0)
3年未満	1	(1)
3年以上6年未満	7	(9)
6年以上9年未満	27	(35)
9年以上12年未満	37	(48)
12年以上	3	(4)
無回答	2	(3)
看護職として勤務した施設数		
平均±標準偏差(最小-最大) ^a	1.8±1.0	(1-5)
1施設	36	(47)
2施設	25	(32)
3施設	9	(12)
4施設	3	(4)
5施設	2	(3)
無回答	2	(3)
勤務した施設で受けた教育		
看護実践能力を育成するための教育		
多くの教育を受けた	32	(42)
まあ教育を受けた	42	(55)
あまり教育を受けていない	1	(1)
教育を受けていない	2	(3)
組織的役割遂行能力を育成するための教育		
多くの教育を受けた	21	(27)
まあ教育を受けた	43	(56)
あまり教育を受けていない	10	(13)
教育を受けていない	3	(4)
自己教育・研究能力を育成するための教育		
多くの教育を受けた	16	(21)
まあ教育を受けた	37	(48)
あまり教育を受けていない	19	(25)
教育を受けていない	4	(5)
無回答	1	(1)
卒業後に受けた(受けている)大学院等での教育(複数回答)		
受けていない	64	(83)
大学院博士前期課程	6	(8)
大学院博士後期課程	0	(0)
助産師学校	1	(1)
その他	3	(4)
無回答	3	(4)

注:n=77. a:無回答2名を除外して分析した.

であった。診療所・病院などの医療施設で勤務している者は37名(63%)であり6割以上であった。勤務施設の所在地は、「岐阜県」29名(49%)で、次いで「愛知県」が25名(42%)であった。

現在の勤務部署での職位は、「スタッフ」が54名(92%)と最も多く、次いで「中間管理職」が5名(8%)であった。

現在勤めている施設での就業年数は、最も多いのは「9年以上12年未満」が20名(34%)であり、次いで「3

表2 在職者の現在の勤務状況

項目	人数	(%)
雇用形態		
正規職員(フルタイム勤務)	29	(38)
正規職員(短時間勤務)	7	(9)
正規職員(産休・育児・介護などの休業中)	16	(21)
非正規職員	8	(10)
勤めていない	17	(22)
主たる職種 ^a		
看護師	39	(65)
保健師	11	(18)
助産師	2	(3)
保健師・助産師	2	(3)
養護教諭	2	(3)
大学教員	3	(5)
その他	1	(2)
主たる勤務施設 ^b		
診療所	4	(7)
病院(20-99床)	3	(5)
病院(100-499床)	14	(24)
病院(500床以上)	16	(27)
高齢者ケア施設	1	(2)
訪問看護ステーション	3	(5)
市町村保健・福祉部門	10	(17)
企業の健康管理部門	1	(2)
小中高等学校	2	(3)
教育研究機関	3	(5)
その他	2	(3)
勤務施設の所在地 ^b		
岐阜県	29	(49)
愛知県	25	(42)
その他	5	(8)
職位 ^b		
スタッフ	54	(92)
中間管理職(看護師長・主任等)	5	(8)
勤務施設での就業年数(年) ^b		
平均±標準偏差(最小-最大) ^c	6.9±4.0	(0.3-12.9)
3年未満	14	(24)
3年以上6年未満	13	(22)
6年以上9年未満	8	(14)
9年以上12年未満	20	(34)
12年以上	3	(5)
無回答	1	(2)

注:n=77. a:現在の雇用形態の設定に「正規職員」「非正規職員」と回答した60名を分析した. b:現在の主たる職種の設定に「その他」と回答した1名を除外して59名を分析した. c:無回答1名を除外して58名を分析した.

年未満」14名(24%)であった。

またこれまでに担った役割は、約4~5割が「委員会委員」「チームリーダー」「実地指導者」と回答する一方、約4割の者は「これまでに役割を担っていない」と回答した。

3. 看護実践の状況、看護実践において大切にしていること、看護実践現場の課題

看護実践として実際に行っている内容について、「卒業時到達目標」を基盤にした項目別に尋ねた結果を表3に

表3 看護実践として実際に行っている（行った）内容

項目	非常に 行っている		まあ行っている		どちらとも いえない		行っていない		無回答	
	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)
援助対象者との信頼関係の形成過程を振り返り評価する	13	(17)	42	(55)	17	(22)	5	(6)	0	(0)
援助対象者との信頼関係を発展させる方法を考え実施する	17	(22)	44	(57)	14	(18)	2	(3)	0	(0)
対象の人権を尊重し倫理に配慮した行動をする	46	(60)	28	(36)	2	(3)	1	(1)	0	(0)
情報を適切に取り扱う	51	(66)	23	(30)	2	(3)	1	(1)	0	(0)
対象の意思決定を尊重した支援の必要性を理解し、方法を考える	38	(49)	34	(44)	2	(3)	1	(1)	2	(3)
本人と家族を生活者として理解する。すなわち、日常生活、対人関係、本人・家族の考え、発達段階、これまでの経過、病気と病気による生活への影響、ヘルスケアサービスの現状が生活に及ぼす影響等の側面から総合的に理解する	32	(42)	37	(48)	5	(6)	3	(4)	0	(0)
対象とのかかわりを通じて自己の気持ち・考えに気づき自己洞察を深め、援助を見直す	21	(27)	41	(53)	14	(18)	1	(1)	0	(0)
家族単位に援助する意義と方法を多様に考え工夫する	26	(34)	34	(44)	15	(19)	2	(3)	0	(0)
個人・家族・地域生活集団のヘルスケアニーズを明らかにし、看護を計画・実施・評価する	21	(27)	38	(49)	13	(17)	5	(6)	0	(0)
対象の主體的な問題解決を促す援助方法を考える	25	(32)	45	(58)	6	(8)	1	(1)	0	(0)
看護の基本技術を的確に実施する	38	(49)	30	(39)	7	(9)	1	(1)	1	(1)
社会資源の現状を把握し、対象のヘルスケアニーズに即した社会資源の活用を検討する	22	(29)	42	(55)	10	(13)	3	(4)	0	(0)
対象に必要なケアを提供する人々（多機関・多職種等）によって構成されるケアチームの一員としてケアを実施する	30	(39)	36	(47)	8	(10)	2	(3)	1	(1)
住民と協働する	6	(8)	13	(17)	32	(42)	26	(34)	0	(0)
保健医療福祉介護の諸制度における自施設の位置づけと期待される機能を理解する	12	(16)	39	(51)	20	(26)	6	(8)	0	(0)
自施設の組織体系における看護部署の位置づけ・役割を理解する	10	(13)	42	(55)	21	(27)	3	(4)	1	(1)
自施設の組織の理念・目標と看護実践とのつながりを考える	15	(19)	36	(47)	22	(29)	4	(5)	0	(0)
社会における看護の役割・責任を考える	16	(21)	38	(49)	17	(22)	6	(8)	0	(0)
実践を通じて、看護実践上の課題を明らかにする	22	(29)	33	(43)	18	(23)	3	(4)	1	(1)
看護実践を充実・改善するための研究に取り組む	12	(16)	25	(32)	21	(27)	19	(25)	0	(0)
看護実践を振り返ることで、よりよい看護実践と自分自身の看護専門職としての成長につなげる	12	(16)	42	(55)	20	(26)	3	(4)	0	(0)

注：n = 77.

示した。「非常にしている」または「まあ行っている」と回答した者が9割以上であった項目は、「対象の人権を尊重し倫理に配慮した行動をする」「情報を適切に取り扱う」「対象の意思決定を尊重した支援の必要性を理解し、方法を考える」などの4項目であった。一方、「行っていない」が2割以上であった項目は、「住民と協働する」「看護実践を充実・改善するための研究に取り組む」の2項目であった。

看護実践において大切にしていることについて項目別に尋ねた結果を表4に示した。「非常に大切にしている」または「まあ大切にしている」と回答した者が9割以上であった項目は、「コミュニケーションを大切にし、信頼関係構築に努める」「倫理的視点を持ち、対象者の尊厳を擁護する」「個人・家族・集団を看護の対象とし、広い視野で理解する」「対象者の背景を踏まえ、個別性のある看護を行う」「対象者に寄り添い、ニーズに合った看護を行う」などの8項目であった。「意識していない」の項目の回答があったのは、「対象者を生活者としてとらえ、退院後を見通した看護を行う」「予

防的視点をもつ」などの4項目であった。

勤務施設における実践現場の課題について項目別に尋ねた結果を表5に示した。「非常にあてはまる」「まああてはまる」と回答した者が8割以上であった項目は、「人手不足・業務多忙のため看護の質の維持・向上が困難になっている」の1項目であった。次いで高値であったのは「看護を取りまく環境から生じる難しさがある」「モチベーションの維持が難しい」で5割以上の者が回答していた。また自由記述欄には10名の記載があり、それらを意味内容ごとに分類したところ【患者・家族に対するケアの時間を確保できない】【スタッフの現任教育が十分ではない】【感染症対応の部署に対する精神的サポートがない】【自己研鑽を職場に申し出ることや時間の確保が難しい】などの項目に分類された。

4. 大学時代に身についた能力

本学が目指す学士課程教育において付与すべき能力が、大学時代にどの程度身についたかを項目別に尋ねた。DP

表4 看護実践において大切にしていること

項目	非常に大切にしている		まあ大切にしている		どちらともいえない		意識していない		無回答	
	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)
コミュニケーションを大切に、信頼関係構築に努める	69	(90)	8	(10)	0	(0)	0	(0)	0	(0)
倫理的視点を持ち、対象者の尊厳を擁護する	53	(69)	22	(29)	2	(3)	0	(0)	0	(0)
個人・家族・集団を看護の対象とし、広い視野で理解する	35	(45)	40	(52)	2	(3)	0	(0)	0	(0)
対象者の背景を踏まえ、個別性のある看護を行う	37	(48)	37	(48)	3	(4)	0	(0)	0	(0)
対象者に寄り添い、ニーズに合った看護を行う	44	(57)	31	(40)	2	(3)	0	(0)	0	(0)
対象者を生活者としてとらえ、退院後を見通した看護を行う	37	(48)	21	(27)	13	(17)	4	(5)	2	(3)
最新の知識や根拠に基づき、安全・安心な看護を行う	45	(58)	23	(30)	8	(10)	1	(1)	0	(0)
対象者による主体的な問題解決を支援する	29	(38)	40	(52)	8	(10)	0	(0)	0	(0)
多職種間・看護職種間で協働・連携する	40	(52)	32	(42)	5	(6)	0	(0)	0	(0)
職場の雰囲気や人間関係を円滑にする	44	(57)	26	(34)	7	(9)	0	(0)	0	(0)
実践の記録を残す	53	(69)	21	(27)	3	(4)	0	(0)	0	(0)
看護観を基盤にする	25	(32)	33	(43)	19	(25)	0	(0)	0	(0)
予防的視点をもつ	35	(45)	29	(38)	11	(14)	2	(3)	0	(0)
組織理念を意識する	16	(21)	39	(51)	20	(26)	2	(3)	0	(0)

注：n = 77.

表5 勤務施設における看護実践の課題

項目	非常にあてはまる		まああてはまる		どちらともいえない		あてはまらない		無回答	
	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)
人手不足・業務多忙のため看護の質の維持・向上が困難になっている	30	(39)	36	(47)	8	(10)	3	(4)	0	(0)
看護実践自体に難しさがある	6	(8)	30	(39)	30	(39)	11	(14)	0	(0)
看護を取りまく環境から生じる難しさがある	13	(17)	32	(42)	21	(27)	10	(13)	1	(1)
看護チーム・多職種チームの機能を高めていくことが難しい	7	(9)	24	(31)	29	(38)	17	(22)	0	(0)
現場の実践に対して組織的な理解が得られない	5	(6)	23	(30)	31	(40)	18	(23)	0	(0)
現任教育が上手く機能していない	12	(16)	23	(30)	24	(31)	18	(23)	0	(0)
他部署や地域との連携が不十分である	5	(6)	25	(32)	22	(29)	25	(32)	0	(0)
対象者と関わる時間が確保できない	11	(14)	26	(34)	24	(31)	16	(21)	0	(0)
モチベーションの維持が難しい	15	(19)	26	(34)	25	(32)	11	(14)	0	(0)

注：n = 77.

表6 大学時代に身についた能力（学位授与方針）

項目	十分身についた		まあ身についた		どちらともいえない		身につけていない	
	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)
看護実践に必要な基本的技術と知識をもち、看護専門職としての責任と高い倫理観に基づき、多様な実践現場において看護実践に取り組むことができる	7	(9)	50	(65)	18	(23)	2	(3)
幅広い視野と複眼的な思考・判断力を身につけ、生活者としての人間を深く理解し、看護専門職として、総合的に判断できる	9	(12)	49	(64)	18	(23)	1	(1)
看護の対象となる個人、家族、地域生活集団の本来持っている問題解決能力を支え、創造的に健康問題の解決に努めることができる	6	(8)	50	(65)	18	(23)	3	(4)
保健・医療・福祉・教育等の関係者並びに地域を構成する人など、ケアにかかわる人々と協働し、主体的に活動できる	5	(6)	45	(58)	24	(31)	3	(4)
看護実践とその振り返りを重ねることを通して、看護学研究的意義を理解するとともに、看護実践の充実・改善と自己を成長させる取り組みができる	5	(6)	55	(71)	15	(19)	2	(3)

注：n = 77.

を基盤にした項目別に尋ねた結果を表6に示した。「十分身についた」または「まあ身についた」と回答した割合が高い方から、「看護実践とその振り返りを重ねることを通して、看護学研究的意義を理解するとともに、看護実践の充実・改善と自己を成長させる取り組みができる」が60名(78%)、「幅広い視野と複眼的な思考・判断力を身につけ、生活者

としての人間を深く理解し、看護専門職として、総合的に判断できる」が58名(75%)であった。割合が一番低かった項目は、「保健・医療・福祉・教育等の関係者並びに地域を構成する人など、ケアにかかわる人々と協働し、主体的に活動できる」の50名(65%)であり、その他の4つの項目は、70%以上であった。

表7 大学時代に身についた能力（卒業時到達目標）

項目	十分身についた		まあ身についた		どちらともいえない		身につけていない		無回答	
	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)
援助対象者との信頼関係形成の意義を説明する	17	(22)	54	(70)	6	(8)	0	(0)	0	(0)
援助対象者との信頼関係の形成過程を振り返り評価する	19	(25)	44	(57)	14	(18)	0	(0)	0	(0)
援助対象者との信頼関係を発展させる方法を考え実施する	15	(19)	48	(62)	13	(17)	1	(1)	0	(0)
対象の人権を尊重し倫理に配慮した行動をする	36	(47)	36	(47)	5	(6)	0	(0)	0	(0)
情報を適切に取り扱う	46	(60)	29	(38)	2	(3)	0	(0)	0	(0)
対象の意思決定を尊重した支援の必要性を理解し、方法を考える	22	(29)	52	(68)	3	(4)	0	(0)	0	(0)
本人と家族を生活者として理解する。すなわち、日常生活、対人関係、本人・家族の考え、発達段階、これまでの経過、病気と病気による生活への影響、ヘルスケアサービスの現状が生活に及ぼす影響等の側面から総合的に理解する	17	(22)	55	(71)	5	(6)	0	(0)	0	(0)
対象とのかかわりを通じて自己の気持ち・考えに気づき自己洞察を深め、援助を見直す	15	(19)	46	(60)	12	(16)	4	(5)	0	(0)
家族単位の援助する意義と方法を多様に考え工夫する	22	(29)	39	(51)	15	(19)	1	(1)	0	(0)
看護過程の構造、および展開方法を理解する	21	(27)	45	(58)	10	(13)	1	(1)	0	(0)
個人・家族・地域生活集団のヘルスケアニーズを明らかにし、看護を計画・実施・評価する	17	(22)	42	(55)	16	(21)	2	(3)	0	(0)
対象の主體的な問題解決を促す援助方法を考える	16	(21)	47	(61)	13	(17)	1	(1)	0	(0)
看護の基本技術を的確に実施する	13	(17)	36	(47)	24	(31)	4	(5)	0	(0)
社会資源の活用を促す援助の意義と看護職の役割を理解する	12	(16)	47	(61)	17	(22)	0	(0)	1	(1)
社会資源の現状を把握し、対象のヘルスケアニーズに即した社会資源の活用を検討する	10	(13)	41	(53)	23	(30)	3	(4)	0	(0)
他機関・他職種との連携の必要性と方法を理解する	16	(21)	39	(51)	20	(26)	2	(3)	0	(0)
対象に必要なケアを提供する人々によって構成されるケアチームの一員としてケアを実施する	13	(17)	46	(60)	14	(18)	4	(5)	0	(0)
住民と協働する意義と方法を理解する	5	(6)	40	(52)	29	(38)	3	(4)	0	(0)
保健医療福祉介護の諸制度における実習施設の位置づけと期待される機能を理解する	6	(8)	44	(57)	23	(30)	4	(5)	0	(0)
実習施設の組織体系における看護部署の位置づけ・役割を理解する	4	(5)	37	(48)	33	(43)	3	(4)	0	(0)
実習施設の組織の理念・目標と看護実践とのつながりを考える	6	(8)	33	(43)	32	(42)	6	(8)	0	(0)
社会における看護の役割・責任を考える	9	(12)	52	(68)	16	(21)	0	(0)	0	(0)
実習を通じて、看護実践上の課題を明らかにする	15	(19)	48	(62)	14	(18)	0	(0)	0	(0)
自らの実践を通して、看護実践を充実・改善するための研究的取り組みについて説明する	5	(6)	44	(57)	26	(34)	2	(3)	0	(0)
看護実践を振り返ることは、よりよい看護実践と自分自身の看護専門職としての成長につながることを理解する	17	(22)	54	(70)	6	(8)	0	(0)	0	(0)
看護学以外の学問領域の学習により幅広い視野を持つことの重要性を理解する	23	(30)	40	(52)	14	(18)	0	(0)	0	(0)

注：n = 77.

卒業時到達目標を基盤にした具体的な内容で尋ねた結果を表7に示した。「十分身についた」または「まあ身についた」と回答した者が9割以上であった項目は、「援助対象者との信頼関係形成の意義を説明する」「対象の人権を尊重し倫理に配慮した行動をする」「情報を適切に取り扱う」「対象の意思決定を尊重した支援の必要性を理解し、方法を考える」などの6項目であった。一方、「十分に身についた」または「まあ身についた」が最も少なかったのは、「実習施設の組織の理念・目標と看護実践とのつながりを考える」が39名(51%)であった。

大学での学びが現在の自分にどのように影響しているかについて項目別に尋ねた結果を表8に示した。「非常にそう思う」「まあそう思う」と回答した者が9割以上であった項

目は、「看護専門職としての基礎」「頑張る力、諦めない力」の2項目であった。一方、「非常にそう思う」「まあそう思う」と回答した者が5割未満であった項目は、「看護研究に関心を持ち、研究を実施」の1項目であった。

大学教育や大学生活が現在の仕事や自分自身にどの程度役立ったか20項目で尋ねた結果を表9に示した。「非常に役立った」または「まあ役立った」と回答した者が9割以上であった項目は、「グループワーク」「看護に対する姿勢についての学び」「看護職としての人間性についての学び」「問題解決への取り組みについての学び」などの6項目であった。一方、5割に満たない項目は、「英語、世界の文化と言葉(中国語、韓国語、スペイン語)」が24名(31%)であった。自由記述欄には34名の記載があり、44件の内

表8 現在の自分自身に影響している（活かされている）大学教育、大学生生活

項目	非常にそう思う		まあそう思う		どちらとも いえない		思わない		無回答	
	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)
看護専門職としての基礎	35	(45)	39	(51)	2	(3)	0	(0)	1	(1)
看護観の構築	29	(38)	38	(49)	9	(12)	0	(0)	1	(1)
他者に分かりやすく伝え意見交換する方法と能力	17	(22)	43	(56)	16	(21)	0	(0)	1	(1)
多角的に事象を捉える力	23	(30)	42	(55)	11	(14)	0	(0)	1	(1)
対象者を生活者として捉えて対象者に合わせた支援	38	(49)	31	(40)	6	(8)	1	(1)	1	(1)
先を見通した視点を持った支援	19	(25)	48	(62)	7	(9)	2	(3)	1	(1)
看護に対する問題意識を持ち、課題を探求する姿勢と問題解決能力	16	(21)	42	(55)	16	(21)	2	(3)	1	(1)
看護研究に関心を持ち、研究を実施	10	(13)	25	(32)	35	(45)	6	(8)	1	(1)
自分の責任で主体的に行動する力	25	(32)	36	(47)	13	(17)	1	(1)	2	(3)
看護専門職としてのキャリアマネジメント	14	(18)	36	(47)	20	(26)	6	(8)	1	(1)
地域のなかで多機関・多職種と連携した支援	13	(17)	41	(53)	16	(21)	6	(8)	1	(1)
卒研の体験による自分の自信や支え	19	(25)	38	(49)	17	(22)	2	(3)	1	(1)
根拠に基づいた看護	29	(38)	40	(52)	7	(9)	0	(0)	1	(1)
倫理的な判断や実践	27	(35)	40	(52)	9	(12)	0	(0)	1	(1)
頑張る力、諦めない力	37	(48)	33	(43)	6	(8)	0	(0)	1	(1)

注：n = 77.

表9 現在の仕事もしくは自分自身に役立った大学教育、大学生生活

項目	非常に役に 立った		まあ役に 立った		どちらとも いえない		役に立って いない		非該当 ^a		無回答	
	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)
看護学の専門科目全般	28	(36)	41	(53)	6	(8)	0	(0)	-	-	2	(3)
看護学の演習	26	(34)	40	(52)	9	(12)	1	(1)	-	-	1	(1)
看護学の実習	39	(51)	29	(38)	5	(6)	1	(1)	-	-	3	(4)
看護学統合演習（平成21・22年度卒業者のみ） ^b	10	(19)	23	(43)	13	(24)	0	(0)	23	-	8	(15)
卒業研究	30	(39)	35	(45)	8	(10)	0	(0)	-	-	4	(5)
教職科目 ^b	4	(17)	12	(50)	3	(13)	0	(0)	53	-	5	(21)
専門関連科目（福祉学、保健学、人体・治療学、生活学）	14	(18)	51	(66)	10	(13)	0	(0)	-	-	2	(3)
教養科目全般	8	(10)	39	(51)	22	(29)	3	(4)	-	-	5	(6)
英語、世界の文化と言葉（中国語、韓国語、スペイン語）	6	(8)	18	(23)	32	(42)	20	(26)	-	-	1	(1)
グループワーク	30	(39)	40	(52)	5	(6)	0	(0)	-	-	2	(3)
看護に対する姿勢についての学び	34	(44)	41	(53)	1	(1)	0	(0)	-	-	1	(1)
看護職としての人間性についての学び	35	(45)	39	(51)	2	(3)	0	(0)	-	-	1	(1)
問題解決への取り組みについての学び	31	(40)	41	(53)	3	(4)	0	(0)	-	-	2	(3)
学内の施設環境（図書館、実習室、マルチメディア教室等）	44	(57)	26	(34)	6	(8)	0	(0)	-	-	1	(1)
友人との交流	45	(58)	27	(35)	3	(4)	1	(1)	-	-	1	(1)
先輩・後輩との交流	23	(30)	23	(30)	20	(26)	10	(13)	-	-	1	(1)
教員との交流	26	(34)	32	(42)	13	(17)	4	(5)	-	-	2	(3)
サークル活動 ^b	11	(28)	19	(48)	8	(20)	1	(3)	37	-	1	(3)
インターンシップ ^b	8	(29)	13	(46)	4	(14)	2	(7)	49	-	1	(4)
ボランティア活動 ^b	7	(29)	11	(46)	3	(13)	2	(8)	53	-	1	(4)

注：n = 77. a：「看護学統合演習」「教職科目」を履修しなかった、「サークル活動」「インターンシップ」「ボランティア活動」を行わなかったと回答したものを非該当とした。b：割合は「非該当」を除いて算出した。

容が取り出された（表10）。これらは【他者との円滑なコミュニケーションを図る方法と能力が身に付いた】【看護に対する問題意識を持ち、課題を探求する姿勢と問題解決能力が身に付いた】【視野を広げることや学びを深めることができた】など15に分類された。

5. 卒業者が今後の本学に重要と考えること

今後の本学にとって重要と考えることについて24項目で尋ねた結果を表11に示した。「非常に重要」または「まあ重要」と回答した者が9割以上であった項目は、「看護生

涯学習の出発点となる能力を培う教育の充実」「創造的に開発しながら行う看護実践を学ぶ教育の充実」「人間関係の形成過程を伴う体験学習が中核となる教育の充実」などの8項目であった。

6. 卒業者の要望や意見

大学に対する要望・意見を自由記述で尋ねたところ11名の記載があり、27件の内容を取り出すことができた。「卒業後に、看護やキャリアについて相談したい時に、支援して頂ける場所があることは有難い」「子育てが一段落してか

表10 現在の仕事もしくは自分自身に非常に役に立った大学教育、大学生生活の具体的な内容

分類	記述の要約（抜粋）
他者との円滑なコミュニケーションを図る方法と能力が身に付いた	自分の意見を伝える手段、人の意見を聞き、自分の考えと結びつける必要性など社会人基礎力につながるコミュニケーションや考える力を身に付けるきっかけになった 実習の時間が多かったため、職場での人間関係の構築や患者とのコミュニケーションに自信が付き、過ごしやすい職場環境を築くことができた
看護に対する問題意識を持ち、課題を探索する姿勢と問題解決能力が身に付いた	診療所看護師として地域に密接にかかわる中、看護師としてできることは何かを常に念頭に置き行動している。その根本にある看護の姿勢は学生時代に友人とディスカッションしたことにある コロナ禍で何でも縮小する傾向がある中、やらないのではなく方法を変えてでもやっていく、必要性が高いところを考え実施可能な方法を模索する姿勢で取り組んでいる。そのような姿勢を身に付けられたのは大学生活のおかげだと思う
専門科目以外の科目により人生経験や世界を広げることができた	看護学と関係ない科目が自分の生き方（世界観）を広げるのに役立っている ボランティアワークセミナーでドヤ街の訪問看護に同行した経験が良い経験として心に残っている。学生時代だからできたことだった
人としての人間性の構築に影響している	実習で経験、学習した看護に対する姿勢や人間関係、学習は、看護師として、人としての考えやあり方に影響している グループワークは考えや価値観の違う相手の意見を聞くことや理解することなど、看護師や人として人生に活かされている
視野を広げることや学びを深めることができた	病院以外に、保健所、訪問看護ステーション、学校、保健センター、助産院などで実習したことで幅広い視野をもって働けた サークル活動を通じ、障がいを持ちながら社会生活をしていく難しさや必要な社会資源を学んだ
自身を振り返ることで得る学びがあった	看護師として働く自分と編入生として学ぶ自分を客観的に振り返ることで得る学びを実感した
看護学統合演習により自己の到達度を知ることはモチベーションにつながった	看護学統合演習は自己の到達度を見ることができ、モチベーションにつながった
大学での学びが実践で役立っている	自然や経済の仕組みなどさまざまな学びが役立っている 看護基礎技術は現場での実践につながった 研究のすすめ方を学んだことで仕事を研究的視点でまとめたり、後輩指導に役立った
看護専門職としての基盤が形成された	さまざまな実習や演習をしたことが自身の看護の基盤になっており、原点があることで振り返ることができる 看護に対する姿勢や看護職としての人間性についての学びはすべての基盤となるので学生のうちに身につけられてよかった
看護観の構築に影響している	看護観についてよく考えたことが現在の看護につながっている 人としての考え方や予防することの大切さなどの学びが仕事に役立っている
地域の中で協働して支援する姿勢が身に付いた	大学生活でのさまざまな立場や思いをもつ人との出会いが、地域で活動する看護職としての協働の姿勢を形成する根底にある
対象の視点（目線）に立ち支援することの大切さを学んだ	患者や家族の視点で看護を考える大切さを学ぶことができた。忙しさや効率を優先する雰囲気看護で大切にすべきことを置き去りにしてしまうこともあったが、学生時代を思い出し立ち戻ることができた
同じ大学の仲間との交流や学びが支えになっている	友人との交流が仕事へのモチベーションを上げた 実習で自分やグループメンバーが担当した患者からの学び、教員に相談したことや教えは今も覚えていて、看護に悩んだとき、迷ったときに思い出している
大学設備を利用し自己研鑽を行った	図書館が充実しており、卒業後も利用している レポートや国試の勉強を学内施設を利用し行ったことはとても役立ったし、そのほとんどを友人と過ごし交流が生まれた
教職の法律関係の知識は常に学び続ける必要がある	教職科目について、法律関係の知識は現場でもとてもよく使うが、毎年のように改定されるため、常に学びが必要である

ら、また学びの機会が得られるよう、支援を継続してほしい」などの卒業生の支援継続への要望や、「大学院での修学を機に、改めて大学での学びは今の自分の実践にすごく影響していると感じたし、学び続けることの大切さに気付いた」という生涯学習の必要性を実感した旨の意見があった。

IV. 考察

1. 卒業時到達目標および DP から見た教育の成果と課題

大学時代に身についた能力に関して、DPに照らした評価では、身についたと回答した割合は、「保健・医療・福祉・教育等の関係者並びに地域を構成する人など、ケアにかか

わる人々と協働し、主体的に活動できる」が、他の項目より低かった。卒業時到達目標に照らした評価で関連する項目を見ると、「保健医療福祉介護の諸制度における実習施設の位置づけと期待される機能を理解する」、「住民と協働する意義と方法を理解する」は、身についたと回答した割合は、他の項目よりも低めであった。加えて、「実習施設の組織の理念・目標と看護実践とのつながりを考える」等の組織の理解を含む項目も、身についたと回答した割合が他項目に比して低く、卒業時の課題であると考えられる。一方、看護実践として実際に行っている内容を見ると、卒業時に課題にあげた項目のうち、「自施設の組織の理念・目標と看護実践とのつながりを考える」等の組織の理解を含む項目につい

表11 今後の本学に重要と考えること

項目	非常に重要		まあ重要		どちらとも いえない		重要でない		無回答	
	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)
看護学の専門科目全般の充実	43	(56)	29	(38)	3	(4)	0	(0)	2	(3)
看護学の演習の充実	39	(51)	33	(43)	3	(4)	0	(0)	2	(3)
看護学の実習の充実	45	(58)	26	(34)	2	(3)	0	(0)	4	(5)
看護学統合演習の充実(平成21・22年度卒業者のみ) ^a	19	(35)	24	(44)	4	(7)	0	(0)	7	(13)
卒業研究の充実	32	(42)	38	(49)	5	(6)	0	(0)	2	(3)
教職科目の充実	18	(23)	32	(42)	22	(29)	1	(1)	4	(5)
専門関連科目全般(福祉学、保健学、人体・治療学、生活学)の充実	26	(34)	42	(55)	6	(8)	1	(1)	2	(3)
教養科目全般の充実	18	(23)	31	(40)	23	(30)	3	(4)	2	(3)
英語、世界の文化と言葉(中国語、韓国語、スペイン語)の教育の充実	12	(16)	31	(40)	26	(34)	6	(8)	2	(3)
保健師・助産師・看護師に共通した看護学の基礎を学ぶ教育の充実	39	(51)	35	(45)	1	(1)	0	(0)	2	(3)
看護生涯学習の出発点となる能力を培う教育の充実	36	(47)	35	(45)	3	(4)	1	(1)	2	(3)
創造的に開発しながら行う看護実践を学ぶ教育の充実	35	(45)	35	(45)	4	(5)	1	(1)	2	(3)
人間関係の形成過程を伴う体験学習が中核となる教育の充実	35	(45)	38	(49)	1	(1)	1	(1)	2	(3)
教養教育が基盤に位置づけられた教育の充実	23	(30)	42	(55)	9	(12)	1	(1)	2	(3)
看護の国際的な動向、今後の社会や医療・看護の変化に対応できる教育の充実	30	(39)	36	(47)	9	(12)	0	(0)	2	(3)
国家試験対策の充実	28	(36)	30	(39)	14	(18)	2	(3)	3	(4)
就職対策の充実	27	(35)	30	(39)	14	(18)	4	(5)	2	(3)
学内の施設環境(図書館、実習室、マルチメディア教室等)の充実	38	(49)	28	(36)	8	(10)	1	(1)	2	(3)
奨学金の拡充	20	(26)	35	(45)	19	(25)	1	(1)	2	(3)
留学への支援	13	(17)	29	(38)	30	(39)	3	(4)	2	(3)
看護職への生涯学習支援	31	(40)	35	(45)	9	(12)	0	(0)	2	(3)
卒業生への相談支援(就業上の悩みやキャリアアップ、大学院への進学など)	25	(32)	39	(51)	11	(14)	0	(0)	2	(3)
卒業生への研究支援	23	(30)	37	(48)	14	(18)	1	(1)	2	(3)
卒業生交流会の開催	13	(17)	42	(55)	16	(21)	4	(5)	2	(3)

注：n = 77。a：「看護学統合演習」を履修しなかった平成20年度卒業者を除外して分析した(n = 54)。

ては、大学時代よりも割合が高くなっており、組織において実践を継続していく過程で習得してきたと思われる項目であった。しかし、「住民と協働する」については、看護実践として実際に行っている内容においても、行っている割合が低かった。在職者の6割以上は、病院等の医療分野に所属しており、住民との協働については機会が乏しいことも考えられるが、地域で暮らす人々の主体的な問題解決能力を高め、地域包括ケアを推進していく中で発揮が期待される内容であることから、大学時代に修得すること、また、卒業後の習得および発揮を支援することが課題であると考えられる。

看護実践として実際に行っている内容として9割以上の回答があった4つの項目については、大学時代に身についた能力においても8割以上が身についたと回答した項目であり、対象の人権を尊重し倫理に適った実践を行う、情報を適切に扱い看護実践を行う、対象の意思決定および主体的な問題解決を支援する等の看護専門職としての姿勢を大学時代に身につけた上で、その後も自信を持って実践していると思われ、これらは、本学における教育の成果である

と考える。

2. 看護実践現場の課題解決に向けた研究的取り組みを通じた卒業生支援

本学は、卒業研究を通して看護実践の中で遭遇する諸問題に責任を持って解決する能力を養うことを目指し、また看護を追究し研究プロセスを踏みまとめることを目的としている。しかし現在の自分自身に影響しているまたは活かされている大学教育や大学生活(表8)について、「非常にそう思う」「まあそう思う」と多くの項目で6割以上の者が回答している中で、「看護研究に関心をもち、研究を実施」のみが4割程度に留まっていた。一方で、大学時代に身についた能力(表6)では「看護実践とその振り返りを重ねることを通して、看護学研究の意義を理解するとともに、看護実践の充実・改善と自己を成長させる取り組みができる」は、8割弱の者が身についたと回答し最も多かった。関連する項目を卒業時到達目標を基盤にした項目(表7)で確認すると、「自らの実践を通して、看護実践を充実・改善するための研究的取り組みについて説明する」は6割程度であり、どちら

も6割以上の回答はあったものの期待値よりは低めであった。これらの結果から、現場の看護実践の改善に向けた取り組みが研究活動に繋がること、また卒業研究での実践と学びが研究活動に活かせることとして、卒業生が捉えられていないと思われる。また勤務施設における実践現場の課題(表5)について尋ねた結果から、「人手不足・業務多忙のため看護の質の維持・向上が困難になっている」は8割以上、「モチベーションの維持が難しい」は5割以上の者が回答していた。自由記述では、【スタッフの現任教育が十分ではない】【自己研鑽を職場に申し出ることや時間の確保が難しい】といった現場の課題の記述があった。昨今のコロナ禍の影響で、現場は逼迫した状況が続き、業務の繁忙度が増し、自己研鑽に時間を確保することが困難な状況がうかがえ、施設内の教育体制が整備されていたとしても、現場で研究に関心をもつことや実施することが十分できていない可能性があると考えられる。今後の本学に重要と考えることの回答で、「卒業生への研究支援」と回答した者が7割以上という結果から、研究的取り組みを行いたいという卒業生の思いが表出されているように思われる。このような課題を抱える卒業生に対し、卒業生が解決したい実践現場の課題に応じて、本学の取り組みである共同研究事業や看護実践研究指導事業などの活動への参加や本学教員による研究支援の活用、大学院への進学等を推奨し、大学として看護生涯学習支援の働きかけを強化する必要があると考える。また、岩村ら(2017)が述べているように、卒業生の看護生涯学習支援においては、大学と就業施設の双方の情報交換・意見交換をもとに協働して取り組むことが重要と考える。

今後は、平成27年度からの各調査年度の結果を詳細に比較検討し、本学の学士課程教育の成果と卒業生が捉えている実践現場の課題を分析することにより、看護生涯学習支援の拠点としての大学のあり方を含めて、大学として必要な取り組みについて検討する必要がある。

謝辞

本調査にご協力いただいた本学卒業生の皆様に深く感謝申し上げます。

本研究は、岐阜県立看護大学のこれまでの取り組みの成果および今後に向けた課題を把握するために計画された本学事業の一部である。

本研究における利益相反はない。

文献

- 星野純子, 小澤和弘, 森仁実ほか. (2017). 学士課程教育の成果と看護実践現場の課題—岐阜県立看護大学における卒業生への質問紙調査から—. 岐阜県立看護大学紀要, 17(1), 137-145.
- 岩村龍子, 大川眞智子, 田辺満子ほか. (2017). 大学と就業施設の協働による学士課程卒業生への看護生涯学習支援のあり方, 岐阜県立看護大学紀要, 17(1), 75-83.

(受稿日 令和3年8月25日)

(採用日 令和4年1月5日)